

■今年の日本経済回復を昇り龍の辰年にあやかりたいものである。そういう意味では自動車業界は飛躍の年となる明るい話題が他業種に比べて多い。エコカー補助金の復活、エコ減税延長などが追い風になる。

商品的には発売1ヶ月で12万台(全国)を受注したトヨタ「アクア」を初めとする低価格なハイブリッド車、プラグインハイブリッド車の登場また、堅調に普及、販売を伸ばしているEV車、ガソリン車では国内初を競う超低燃費車、オールメーカーの販売が出揃った軽自動車、そして、年齢に関係なくときめくスポーツカーの復権などである。まだある。昨年、販売を大きく伸ばした輸入車メーカーが日本車に挑戦を挑む小型ハイブリッド車、EV車、そして、欧米伝統のスポーツカーの新型車投入などである。

ここで、記述してきた次世代車の表現で何かお気づきであろうか。「車とカー」の使い方である。どちらかという日本語の「車」というと、環境重視の経済性、実用性を重んじたクルマ群だが、英語の「カー」という表現はドライバーの心を揺さぶる、所有欲を高めるワクワク観をイメージさせる先進的なクルマを感じさせるのだ。それは夢のクルマ「スポーツカー」ではないか。「スポーツ車」では味がない。

各メーカーが昔日のように新型スポーツカー発売に意欲を見せている。もし、スポーツカーが国産、輸入車で10車種以上揃い「スポーツカーショー」を開催したら人気沸騰すること間違いのない。

その観点から見れば、今、ディーラーのショールームのあり方である。ショールームに自社扱いのスポーツカーを1台、ポツンと展示しても余り感動を与えない。効果が薄い。望めるなら、市内のどこかにモーターモールのような「オールスポーツカー専用ショールーム」として各メーカーからスポーツカーを一堂に出品して展示できる会場(絵の展示会場のような)ができると最高だ。もちろん、今の経済情勢、社会状況では夢の夢ではあるが。その夢は来年の「初夢」で実現できるかも知れない？

■今年の国内新車販売見通しは、登録車323万5500台(前年比20・3%増)、軽自動車178万台(同、17・0%増)と決めた。日本自動車工業界と全国軽自動車連合会の予測である。伸び率は1969年以来で最高という。東日本大震災やタイ洪水による減産影響からの立ち直りとエコカー減税の延長、エコカー補助金の復活が需要を大きく押し上げると予想した。このように、理由はどうであれ、過去最高とか、増販予想、需要回復などという前向きな言葉語句が自動車業界に語られることは喜ばしい。あと、ひとつ、「円高解消」が出来れば、ユーザー、ディーラー、メーカー三方良しとなるのであるが。(S・T)

■この本が発行される頃には札幌で雪まつりが開催されている。東日本大震災の影響で、外国人旅行者の減少が懸念されていたようだが、今の所その影響は少ないようだ。特に雪の積もらない南国の人達にとって、雪は憧れがあるようだ。

また、今年はインドとの国交樹立から60年の節目の年となっているようで、インドの人達が雪像作りに励んだと聞いている。またその関連イベントも催されているようだ。インドと言えば近年発展が目覚ましく、なおかつ日本の企業が新しい市場として注目している国でもある。雪まつりのような文化交流がお互いの国の理解を深め、別の分野での交流に繋がれば、お互いの国にとって大変有意義なことと思う。(K・Y)